

2025 年 6 月 29 日（日）「あなたは何をしたのか ～エリファズの第一回弁論～」

ヨブ記 4:1-21

1 テマン人エリファズが答えた。

《かつてのヨブは》

- 2 もし、あなたに言葉を語ったなら、あなたはそれに耐えられるだろうか。しかし、誰が言葉を控えずにいられるだろう。
- 3 あなたは多くの人を諭し、その萎えた手を強くした。
- 4 あなたの言葉はつまずく者を起こし、弱った膝に力を与えた。
- 5 しかし今、あなたにそれが降りかかると、あなたは耐えられない。それがあなたの身を打つと、あなたはおびえる。

《あなたは何をしたのか》

- 6 神を畏れることが、あなたの頼みではなかったのか。その歩みが完全であることが、あなたの望みではなかったのか。
- 7 思い起こしてみよ。罪がないのに滅びた者があったか。正しい人で絶ち滅ぼされた者がどこにいたか。
- 8 私の見たところ、不義を耕し、労苦を蒔く者は、それを刈り取っている。
- 9 彼らは神の息によって滅び、怒りの息吹によって消えうせる。
- 10 獅子の雄たけびも獰猛な獅子のうなり声もやみ、若獅子の牙は折られる。
- 11 雄獅子が獲物を得ずに滅びれば、雌獅子の子らは散らされる。

《不気味な夜の幻》

- 12 言葉が私に静かに近づき、私の耳はそのささやきを捉えた。
- 13 夜の幻で思い乱れ、人々が深い眠りに落ちるとき、
- 14 恐れとおののきが私を襲い、私の骨をことごとく震わせた。
- 15 霊が私の顔をかすめ、私は身の毛がよだった。
- 16 それは立っていたが、その姿を私は見分けられなかった。形あるものが私の目の前におり、静寂の中から声が聞こえた。

《冷淡な神像》

- 17 「人は神より正しくありえようか。人は造り主より清くありえようか。
- 18 見よ、神はその僕たちを信頼せず、御使いにも過ちを認める。
- 19 まして、泥の家に住む者、塵に土台を据える者は、虫のように潰される。
- 20 彼らは朝から夕まで打ち砕かれて、顧みられず永遠に滅びる。
- 21 天幕の綱が引き抜かれれば、彼らは死んで、知恵も役に立たない。」

【序論】

ヨブ記は、苦しみの中にある人にとってどのようなことばが慰めとなるか、また人が如何にその反対のことをやりがちであるかを教えています。今日扱う4章には、ヨブの「友人」の一人であったエリファズが語ったことばが記録されています。ここでの内容も詩的であるため、読者にとって意味が掴みにくい面がある。また、彼が言っていることには真理が含まれているため、何が問題なのかを私も長年うまく説明できませんでした。例えば、

人は神より正しくありえようか。人は造り主より清くありえようか (4:17)

確かに、ここで言われていることは100%正しい。しかし、この真理を呈示する文脈に問題があるのです。私たちも、自分の心の中にある「同じ事柄」を語るとき、相手によって、それが慰めをもたらすこともあれば、まったく逆の効果をもたらしてしまったという経験がないでしょうか。人の心は繊細であり、一人ひとり性格も生き方も環境も異なります。よって、同じことばが常に同じ結果につながるとは限りません。

【本論】

エリファズという人物については、第五回目の説教の中で説明させていただきました。

『テマン』はヘブル語で『南』という意味で、死海の南部にあるエドムの村出身だと思われます。エドム人はエサウの子孫であることから、イスラエル民族とも近い関係にあった人かもしれません。『エリファズ』という名前の意味は、ヘブル語で『神は純金』です。」

本論1. かつてのヨブは

もし、あなたに言葉を語ったなら、あなたはそれに耐えられるだろうか。しかし、誰が言葉を控えずにいられるだろう。(4:2)

エリファズは、現在のヨブの状態ではもしかしたら自分が語ることばに耐えられないのではないかと……と気遣いつつも、ヨブの発言を受けて黙っていられないという思いを述べます。ここには、「何という情けないことを言うようになってしまったのだ」という失望の響きがある。

あなたは多くの人を諭し、その萎えた手を強くした。あなたの言葉はつまずく者を起こし、弱った膝に力を与えた。しかし今、あなたにそれが降りかかると、あなたは耐えられない。それがあなたの身を打つと、あなたはおびえる。(4:3-5)

エリファズは、かつてのヨブが優れた助言者、指導者であったことを思い起こしています。苦しみ叫び求める人や寄る辺のないみなしごを救い(29:12)、見えない人の目となり、歩けない人の足となり(29:15)、貧しい人の父となり、見知らぬ人の訴えに力を尽くした(29:16)。そのような立派な生き方を貫き、多くの人から尊敬されていたヨブが、自分の生まれた日を

軽んじ、生まれてこなければよかったなどと言う。弱者の立場に立った今、あなたにはそれが耐えられないのか、と。

本論 2. あなたは何をしたのか

神を畏れることが、あなたの頼みではなかったのか。その歩みが完全であることが、あなたの望みではなかったのか。(4:6)

エリファズは、ヨブの信仰と行いが模範的であったことを認めています。「完全」ということばを彼自身がヨブについて使っているのが目に留まります。ヨブが神を畏れる生き方をしていたことを、誰もが認めていました。しかし…

思い起こしてみよ。罪がないのに滅びた者があったか。正しい人で絶ち滅ぼされた者がどこにいたか。私の見たところ、不義を耕し、労苦を蒔く者は、それを刈り取っている。彼らは神の息によって滅び、怒りの息吹によって消えうせる。獅子の雄たけびも獰猛な獅子のうなり声もやみ、若獅子の牙は折られる。雄獅子が獲物を得ずに滅びれば、雌獅子の子らは散らされる。(4:7-11)

ここにエリファズの本音が現れ始めます。彼は、ヨブが災いに遭ったのは何かしらの罪を犯したからだと言うのです。「罪がないのに滅びた者」「正しい人で絶ち滅ぼされた者」「彼らは神の息によって滅び、怒りの息吹によって消えうせる」というのは、ヨブの息子たちを指しているのか、あるいは災いに遭ったヨブ家全体のことを言っているようにも聞こえます。

当時は応報思想が一般的な価値観であったため、神は正しい人には富と健康を与え、罪を犯した者は病気や貧困をもって罰すると信じられていました。この「単純化」が如何に人々を傷つけていたかは想像に難くありません。ヨブはすべてを取り去られた上に、そのようなことを「友人」に言われるのです。「お前は一体何をしでかしたんだ?」。エリファズの発言には、このような響きが含まれています。

「獅子」は悪人の比喩として用いられました。悪いことをした人は神に打ち砕かれ、ぐうの音も出ない状態になる、そんなことを言っているのでしょう。

しかし、エリファズはヨブの本質と彼に降りかかった災いの関係を理解していないのです。ヨブは決して悪いことをしたからひどい目に遭ったのではなかった。正しく生きていても苦しい経験をしうるのが人の人生というもの。応報思想には限界あり、落とし穴あり、物事を単純化しすぎるきらいがあります。小畑師のことばをお借りしましょう。

「はたして悪党は不幸ですか。逆に、正しい人は報われていますか。義人の苦難ということがあるではありませんか。また、『悪い奴ほどよく眠る』ということがあるではありませんか。正直者が馬鹿を見ているではありませんか。悪人横行し、善人は微行する、というのが現実ではありませんか。」(『ヨブ記講録』 p. 69)

ヨブ記を「応報思想への反駁の書」と解釈する人も少なくありません。

本論 3. 不気味な夜の幻

言葉が私に静かに近づき、私の耳はそのささやきを捉えた。夜の幻で思い乱れ、人々が深い眠りに落ちるとき、恐れとおののきが私を襲い、私の骨をことごとく震わせた。霊が私の顔をかすめ、私は身の毛がよだつた。それは立っていたが、その姿を私は見分けられなかった。形あるものが私の目の前におり、静寂の中から声が聞こえた。(4:12-16)

エリファズは、自分の一つの経験を話し始めます。身の毛のよだつような不気味な経験です。彼が深い眠りに落ちたとき、何か霊的な存在が夢枕に立って話しかけたというのです。神からの霊がそのような寒気をもたらすような感覚を人に与えるのかどうか、やや疑問が残るところではありますが、アブラハムもまた「暗黒の恐怖」に襲われたという記録があります。

日が沈みかけた頃、アブラムは深い眠りに落ち、恐怖と深い闇が彼を襲った。(創世 15:12) エリファズが彼自身のこの経験を語ったのは、17 節以下の内容を伝えることが目的でした。

人は神より正しくありえようか。人は造り主より清くありえようか。(4:17)

このことばに反論の余地はありません。彼が言っていることは正論であり、人間の不完全性と神の完全性の違いは誰もが認めるところであるはずです。聖書自体がそのことを証ししています。

あなたの僕を裁きにかけないでください。生ける者の中であなたの前に正しい者はいないからです。(詩編 143:2)

自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理は私たちの内にありません。(Iヨハネ 1:8) しかし、ヨブはエリファズにそんなことを言われる前から、その真理は百も承知なのです。彼が常に念入りに、自分の息子たちの隠れた罪のためにも「償いの儀式」を繰り返していたことを忘れてはならないでしょう(1:5)。一体いつ、ヨブは自分が神より優れているなどと主張したのでしょうか。彼が3章で述べたことは、神への非難ではなく、ただただ自分の惨めさ、死ぬほど辛いという気持ちの吐露だったのです。しかし、エリファズはその「心の叫び」を「神への批判」と受け取ったのでした。そして、ヨブが反駁できない論理でもって、「お前は神より正しいのか?」「お前は神よりも聖いのか?」と迫ったのです。

エリファズの神観がきわめて冷淡である点も指摘しておきましょう。

見よ、神はその僕たちを信頼せず、御使いにも過ちを認める。まして、泥の家に住む者、塵に土台を据える者は、虫のように潰される。彼らは朝から夕まで打ち砕かれて、顧みられず永遠に滅びる。天幕の綱が引き抜かれれば、彼らは死んで、知恵も役に立たない。(4:18-21) ここで言われていることを総括すると、神はご自分よりも聖くない者に容赦なき仕打ちをもたらす方だということです。ヨブはその恐ろしい神の御手に打たれたのだと。

【結論】

エリファズのことばには「慰め」がありません。ヨブの心に寄り添うどころか、傷口に塩を塗り込むような内容です。彼が語る「真理」は、ヨブの状況には適切ではない。もしヨブ

が神を畏れておらず、実際に罪を犯し続けていたのであれば、あるいは彼の「真理」は意味があったのかもしれませんが。しかし、ヨブは神を畏れ、人々を愛し、息子たちの罪をとりなす生き方をしていました。神を呪うこともなかった。それゆえに、エリファズの言っていることはヨブには当てはまらないのです。

では、ヨブにとって一番必要だったのは何でしょうか。それは、ただただ愛と共感を示してもらおうということ以外にはなかったのです。「どうして君にこんなことが起きてしまったのだ！」という叫びと涙が伴えば、それでよかったのです。ヨブが語る叫びに対して口を挟むのではなく、「ほんとうにそうだね」「君がそう言うのは本当に無理もないことだよ」と、寄り添ってもらいたかったのです。

私たちもまた同じ人間の心を持っています。自分の言うことが否定されるということは誰にとっても辛いことではないでしょうか。無条件に寄り添ってもらいたい。そして、それは他の誰かも同じように思っていることなのです。私たちの内から、そのような「アガペー」に根ざす心とことばが溢れることを求めています。

私たちが本当に必要としているのは、「こうすれば祝福される」「ああすれば裁かれる」という条件付きの声ではなく、何があっても見捨てずにそばにいてくれるお方です。イエス・キリストは、誰よりも苦しみを知り、涙を流し、友ラザロの墓の前で声を上げて泣いた方でした。そのお方は、十字架の上で「神に呪われた者」となり、私たちに代わって完全なる沈黙の中に取り残されました。だからこそ、どんな苦しみの中にも、イエスは共にいてくださる。そして私たちもまた、人知れず「現代のヨブ」となっている友のそばで、沈黙と共感をもって寄り添う者とされていきたいと願うのです。

【祈り】

天の父なる神様、あなたの御前に静まり、ヨブのような深い苦しみの中で、語るべきことばを失うときにも、あなたが共にいてくださることを覚えて感謝いたします。私たちもまた、ときにエリファズのように、正しいことを語りながら、誰かの心を傷つけてしまうことがあります。どうか私たちの口に、愛によって吟味されたことばを与えてください。そして、もし私たちの隣に苦しむ「ヨブ」がいるなら、何かを教えようとするのではなく、ただ涙を共に流し、沈黙と共感をもって寄り添える者とならせてください。十字架において、すべての痛みを担ってくださった主イエス・キリストの姿を見上げ、私たち自身もまた、アガペーに根ざす者とならせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
苦しみの中にある者に、いつもやさしく寄り添ってくださる、主イエス・キリストの恵み、
人の存在とすべての状況を、無条件に包みこんでくださる、父なる神の愛、
静かに心に寄り添い、慰めと励ましを注いでくださる、聖霊の親しき交わりが、
この場におられるお一人おひとりの上に、そのご家族と歩みのすべての上に、今も後も、
世々限りなくありますように。